

追い風、
向かい風

SPECIAL INTERVIEW

「挑戦」は

若い人の特権ではない。

杉本 昌隆

MASATAKA SUGIMOTO

棋士

担任教師の一言で 学校に居場所を見つけられた

小学校のころは、休み時間になると教室で本を読んでいるような少年でしたね。漫画も好きで、藤子不二雄作品は一通り読んでいます。高学年になると推理小説が好きになり、お気に入りには江戸川乱歩でした。将棋との出会いは7歳の時。父から教わったいろいろな卓上ゲームの中に将棋も含まれていて、駒に特性があることを知り、がぜん興味を湧きました。その約半年後、アマチュアの将棋大会に出た際に、審判長をされていたのが、後に私の師匠になる板谷進九段だったんです。その姿を見て「大好きな将棋を仕事にできるなら自分もプロになりたいな」と思ったことを覚えています。

プロになるための年齢制限がある将棋界においては、早いうちから弟子入りし、師匠の推薦を受け、奨励会（プロ棋士養成機関）の入会試験に合格しなくてはなりません。私は小6で入会しました。入会後は月に2回、東京または大阪で行われる「例会」で研鑽を積み、昇級を重ね、リーグを勝ち抜くというのがプロへの道のりなんです。現在の例会日は土日に設定されていますが、当時は平日だったため、学校を休む必要がありました。中学生になると、休むことをよしとしない雰囲気为学校側にあり、いつも居づらさを感じていました。そんな気持ちで中3になり、新しい担任の先生に例会日について伝えたときのこと。その先生は「学校として快諾はできないけれど、あなたの年齢で自分の将来を見据え、目標を定め、そこに向かって努力をしていることは素晴らしいことです。個人的には応援します」と言ってくださったんです。中学校で自分の居場所をやっと見つけられた瞬間でした。

師匠の一言が 私の大きな勇気になった

私の地元である愛知県を代表する板谷進九段に弟子入りし、奨励会に入会したものの、すぐに高い壁に直面しました。奨励会は6級からスタートし、21歳までに初段、26歳までに四段をクリアできなければ退会を余儀なくされます。私は5級に上がるのに2年7か月も要してしまい「プロになる素質がないのかもしれない」と自信を失いかけていました。そんな時、師匠が「心配するな。そのうちに強くなる」と声をかけてくださり、その一言が私の大きな勇気になりました。常に安心感を与えてくださる師匠のおかげもあり、私は21歳で四段に昇段しプロ棋士に。しかし、プロになった姿を師匠にお見せすることはできませんでした。師匠は、私が19歳の時、47歳という若さで病気で急逝されてしまったんです。もっと将棋を指したかったらうな、もっとたくさんの弟子を育てたかったらうな、そんな気持ちもあって、私は31歳で弟子を取る決意をしました。

将棋には正解がないから 導くときは「問いかける」

現在、藤井聡太竜王を含め、弟子は13名います（2022年2月末現在）。指導する立場として、常に意識していることは「上から目線にならないこと」。将棋には正解がありません。私が思っている正解が必ずしも正解とは限らないのです。正解がないにもかかわらず、年長者からの忠告として「正解はこ

れだ」と指し示すことがあってはならないというのが私の考えです。導く必要があるときは「私ならこの手を選ぶけど、君ならどの手を選ぶ？」と問いかけるように心がけています。実際、弟子の選んだ手のほうが優れていることはありますから。そのいい例が、2018年に行われた私にとって初の師弟対決と言えるでしょう。相手は、当時15歳の弟子、藤井竜王（当時六段）でした。彼の強さはよく理解しているので、私は事前に研究を重ね、あらゆる場面を想定し、本気で臨みました。しかし、ある局面で藤井竜王は私の想定外の手を選んだのです。それを機に私は致命的なミスをしてしまい、投了（負けを認め相手に伝えること）しました。

将棋には、得点制やタイムを競うスポーツのように「惜しい」という結果がありません。しかも負けを自ら認め、「まいりました」と声に出し、対局を終えることがルールになっているため、負けるとひたすら悔しいんです。私も若いころは負けるときに悔しさのあまり扇子を折っていました笑。ただ、師弟対決に関して言えば「自分が負けること＝弟子が勝つこと」であり、それは自分の弟子が師匠を負かすほどの強い棋士になった証拠でもあるので、悔しさよりも感慨深さの方が大きいですね。

50歳での昇級を叶えた 2つの大きな原動力

20代のプロと50代のプロだったら、かなりの高確率で、ひらめきや体力で優る20代が勝つのが将棋の世界。そういう意味で、私が50歳で昇級したことは非常に珍しいことでした。当時、私がいたC級1組のリーグ戦には約40人がいて、藤井竜王（当時七段）を含め、大半が伸び盛りの若い棋士たち。2つしかない昇級枠を争う相手に、私をマークしていた人はいなかったはず。そんな中で挑戦する原動力になっ



2018年3月8日、第68期王将戦で対局し、千日手指し直し局（引き分けとなり最初から指し直すこと）に臨む杉本昌隆七段（右）と藤井聡太六段（肩書は対局当時）。なお、将棋界では公式戦で弟子が師匠に勝つことを「恩返し」という。

たものは2つ。1つはやはり藤井竜王の存在です。「弟子が誇りに思えるような将棋を指したい」との思いが、大きな原動力になりました。もう1つは当時小学3年生だった息子の一言。ある日、息子が「パパは昔、B級1組にいたんでしょ？」と言うわけ。私は2015年度に降級してC級1組にいたので、息子のその言葉で私の闘志に火が付きました。「父親としていいところを見せる」との思いが確固たるモチベーションとなり、昇級につながったのだと思います。

「挑戦」は若い人だけの特権ではありません。人はいつになっても自分が変わりたいと思えば変われます。私は今53歳ですが、これから先も1局でも多く勝ちたいし、皆さんを楽しませる将棋を指していきたいと思っています！



杉本昌隆さん
とっておきの手土産をプレゼント！

プレゼントクイズ（P36）正解者の中から抽選で8名様に、直筆サイン本『天才少年棋士を育てた杉本師匠！将棋の「しょ」の字も知らない私を、将棋ができるようにしてください!!』と、対局中によく食べるといふ、カンロ「健康のど飴たかかうマヌカハニー」をプレゼントします。ふるってご応募ください！

わたしの『ディスクィ！』

「将棋盤と駒」

教室も持っているので、複数の将棋盤と駒のセットを所有していますが、これが一番のお気に入り。理由は、弟子との研究会でもよく使っていて愛着があるから。将棋盤は厚くなるほど値が張ります。駒は彫られた文字部分に流し込んだ漆が、面部分よりも盛り合っている「盛上駒」というものが高価なものになります。とはいえ、将棋を始めるのに盤と駒は必ずしも必要ではありません。興味のある方はスマホのアプリで始めるのも「手」ですよ！



杉本・昌隆 | すぎもと・まさたか |

公益社団法人 日本将棋連盟 棋士。1968年11月生まれ、愛知県名古屋市出身。1980年、6級で故・板谷進九段の門下となる。1990年10月1日四段。2002年5月、第20回朝日オープン将棋選手権準優勝。2019年2月22日、七段昇段後公式戦で190勝を挙げ八段に。第77期順位戦では9勝1敗で、50歳でのB級2組昇級を果たす。杉本昌隆将棋研究室を主宰し、後進育成にも注力。藤井聡太竜王の師匠として知られる。2021年より日本将棋連盟非常勤理事を務める。2022年1月、公式戦通算600勝を達成した棋士に贈られる「将棋栄誉賞」を受賞。将棋の戦術書は15冊以上に上り、近著の『天才少年棋士を育てた杉本師匠！将棋の「しょ」の字も知らない私を、将棋ができるようにしてください!!』（ソレイユ出版）は初心者にも分かりやすいと好評。